或問　WAKUMON　71
No.34,（2018）pp.71-78

山本竟山と富岡鉄斎の交遊について

蘇　浩

はじめに

近代の代表的な碑学書家である山本竟山(1863〜1934)は、書学の活動を通して多くの文人たちと交流した。書簡のやり取りはもちろんのこと、知人の紹介によって関わった人物もいるが、直接交遊した人物としては、文人画家の富岡鉄斎などが挙げられる。鉄斎との交遊のきっかけは、明らかではないが、おそらく竟山が大正十一年（1912)、京都に帰り、富岡家と同じ室町通りの様相、歩いて数分の近隣に居を構えたことだと推測される。小論では、清荒神清澄寺・鉄斎美術館に所蔵される書画作品、および山本家に残される書簡や書画作品を手がかりにして、竟山と鉄斎の間で築かれた文人交流を明らかにしたい。

一、竟山・鉄斎と董其昌

山本竟山、名は由定、通称は卯兵衛、別号は襲鳳、岐阜県生まれである。鳴鶴門流[1]の書家であり、鳴鶴の紹介で楊守敬と師弟関係を結び、七回（1902、1903、1906、1910、1912、1921、1930）にわたって中国に遊学し、たくさんの文人とネットワークを組んで、北碑の真髄を習得した。1904〜1912 年の八年間にわたり台湾総督府の文化顧問を務めたが、台湾書道の発展に多く貢献した。1912 年に京都に移り、多くの子弟を指導し、関西書壇にその名を轟かした[2]。また、たびたび天皇家に上書する代筆や名跡碑石の揮毫をしばしば依頼され、金石法帖や書画などを数多く網羅・蒐集する書道教育家でコレクターでもあった。それに、書壇において泰東書道院・日本美術協会・東方書道会・関西書道会などの顧問・審査長（員）を務め、書道グループ平安同好会の発足と複数な書の展覧雅会を主催・協力などの目立った業績が語られている。

かつて、竟山旧宅の書斎には、富岡鉄斎自筆「鉄斎外史」（図 1）というユーモアに満ちた自

---

[1] 明治三筆の日下部鳴鶴（1838〜1922）の弟子である。明治十三年（1880）書家の楊守敬（1839〜1915）が、清国初代公使である何如璋の随員として派遣され来日した。楊守敬はこの時、一万数千点にも及ぶ碑法帖を携えて来日しており、これが日本の書道界に大きな影響を与え、以後北朝の碑板石刻を尊ぶ、いわゆる碑学派の書風が日本でも盛んになった。鳴鶴は、頻繁に公使館で楊守敬と深く交流し、書法理論などの教示を求め、書物と碑法帖を貸してもらい、莫大な新資料で開眼した。竟山も持ち込まれた新しい刺激で、斬新で爽やかな書風によって頭角を現していた。

[2] 門下に佐々木惣一(憲法学者・文化勲章受賞)、湯川秀樹(ノーベル物理学賞受賞)等が挙げられる多彩な方面の人たちが集まっていた。

画像が飾られていた。そこに座って読書している鉄斎の様子は、儒画家をイメージさせる。富岡鉄斎[3]（1837～1924）は、明治のはじめ頃、一時名を鉄斎としたが、しばらくのち百錬に改名した。字を無倦、号を鉄斎。董其昌（1555～1636）の名言「読万巻書、行万里路」[4]（万巻の書を読み、万里の路をゆく）を座右の銘として実践してきた人で、ひたすら学芸一筋に打ち込んだ文人である。大正六年(1917)に帝室技芸員、翌年に帝国美術院会員となり、最晩年まで盛んな制作活動を行い、独自の画境を築いて、近代の日本美術史において傑作を遺した。鉄斎は、董其昌の書斎の号「画禅室」を借りて、自分の書斎を「画禅庵」と名付けた。竟山は、第二回（1903）渡清した際、原拓『餘清斎帖』八冊[5]を蒐集し、蔵書用に度々臨書した。この『餘清斎帖』は、董其昌によって鑑定され、帖首に「餘清斎」の三大字が題されている。のちに、竟山は斎号を餘清斎とし、書斎に『餘清斎帖』に収録されている董其昌の題字「餘清斎」を模刻した板額（図 2）を掛けた。そこから、竟山と鉄斎は董其昌を愛好する一斑が窺える。

図 1

図 2

竟山と鉄斎の交遊を解明する関連史料として、山本家に所蔵される「扇面画」と四通の書簡、及び鉄斎美術館の「佳実図」などが挙げられる。書簡には消印と「年」がなく、「月日」のみ残されているのは、両者が近隣に住んでおり、直接やりとりしたからだと推測される。つづいて、書簡と作品を解読していきたい。

二、鉄斎父子との交遊

---

[3] 国学、儒学、仏典を学び、勤皇派の志士と交わり、明治以後諸神社の宮司を勤めた。絵画に関しては、特定の師につかず、はじめ大和絵、中期以降中国文人画の手法を学んだ。鉄斎は日本各地を踏破して生み出された真景図や山水画、人物画や神仙画、風俗画、花卉・鳥獣画などの多岐にわたり創作していた。

[4] 董其昌、明の文人。字は玄宰。号は思白。官は太子太保に至った。詩・書・画に通じ、文人画を絵画の最高の様式として南宗画の名を与え、書は行草を得意として一家をなした。著作『画禅室隨筆』巻二の「画訣」に、「画家六法、一気韻生動。気韻不可学、此生而知之、自有天授、然亦有学得所。読万巻書、行万里路、胸中脱去塵濁、自然丘壑内営、立成鄄鄂」とある。

[5] 『餘清斎帖』は、董其昌の友人で、徽州の大収集家である呉廷が所蔵の晋・唐・宋の名品の真蹟にもとづいて刻した法帖である。

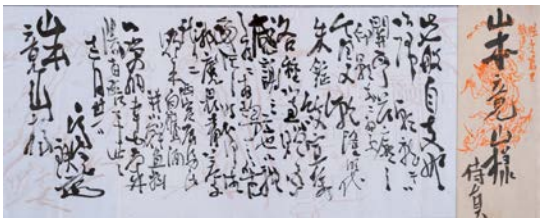

図 3

図 4

図 3 釈文　先般自支那御帰朝、就テハ関雲長廟之印影茲ニ拝受。千字文、乾隆、明代朱錠、紋宣紙等各種御恵贈被下感謝之至也。御禮之為ニ拝趨可申候處、多忙之時節御邪魔畏粛差支、代リニ西宮辰馬氏贈来白鷹酒幷小鮮魚料御笑納幸甚、尚来陽拝晤可申述候。富岡鉄斎。十二月三十一日。山本竟山様。

鉄斎は、生涯中国に行くことがなかったが、中国への興味や憧れを常に抱き続けた。図 3 の書簡は、竟山が中国に遊学した際、鉄斎のために購買した印影、及び千字文、乾隆、明代朱錠、紋宣紙などの恵贈に対して、感謝の意および「白鷹酒、小鮮魚料」という返礼の贈呈を記した書簡である。その他、鉄斎からの「歳暮祝賀　呈小鱗」の封筒、「金五圓」の紙シート、「煎餅」の包み紙（図 4）が残され、竟山との交遊の一端を確認できる。

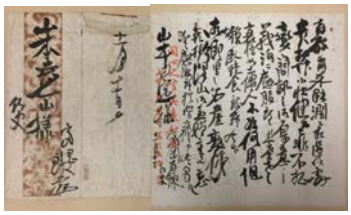

図 5

図 7

図 8

図 5 釈文　拝啓、爾来疎濶ニ相過候處、貴契御壮健是非不相變、御問訊之御厚意之義、洵ニ感服致候。愚老益老衰、恰如土偶人、不為何用但嬾臥徒食致居候。今日ハ御郷里之名産熟柿、乾柿澤山御恵贈、重々御慈愛感激致候。猶他日御禮申述候。匆々頓首。十一月十一日。富岡百錬。拝具。山本由定様。

図 6 釈文　「硯壽」（白文方印）世傳柿有七絶、一多壽、二多陰、三奔（無）鳥巣、四無虫壽（蠹）、五霜葉可玩、六佳實可啖、七落葉肥。竟山道兄見畫、濃州之名柿三籃、蓋柿子中之絶品□□、可珍尝者也。感謝之餘、卒能寫以充咲資。大正四年十一月賜柿老翁鐵齋（款記）、「富岡百錬」（白文方印）、「天賜壽福」（朱文方印）、「臺道人」（白文方印）。

図 5 は、鉄斎が竟山から故郷の名産である柿（熟柿・乾柿）をたくさんもらった後、謝意を書き留めた書簡である。「愚老益老衰、恰如土偶人、不為何用但嬾臥徒食致居候」という鉄斎が自らを「愚老」「土偶人」と自虐し、滑稽味を帯びている。図 6 は、大正四（1915）年、鉄斎が竟

山から贈られた柿の返礼にちなんだ「佳実図」（清荒神清澄寺・鉄斎美術館蔵）であり、「世傳柿有七絶」は、唐代中国の『酉陽雑俎』[6]が出典である。鉄斎は、柿の「七絶（七つの利点）」を列挙してから、竟山からもらった実家の濃州（美濃）の柿を讃えた。両氏の交誼を知る恰好の絵画と言えよう。鉄斎の静物図は多くないが、素朴な線描とラフな筆触、さらに一部分しか見えない籠の描き込みに禅味が表れる。書き込まれた画賛は、まさに絵画の延伸となり、自由で躍動感な書風で静物の柿と絡み合いながら、豊かな感情を表現している。

図 7 釈文　山遠水長　大正癸亥五月、賀竟山書学士周甲子壽、八十又八叟鉄斎。

図 8 釈文　先般道契周甲義之慶賀之為、扇子ニ可相成、拙筆大遅滞、甚恐怖之至也。尊師之莫雑定、尊意果然候ハ、乃更延滞之謝　□可改寫否、是ニ而御寛恕之恩召ニ相成候哉、一應供尊賢。僕拝趨可致歩脚不自由ニ付、是又御用捨願上候。五月二十二　。富岡百錬。山本竟山。道契。

図 7 は、竟山の還暦を祝う鉄斎の扇面図であり、題箋に「賀竟山道友華甲壽 鐵齋百錬」とある。円熟期である最晩年の鉄斎作品である。鉄斎は特に扇面画が好きで、慶事や諸事の返礼に気軽に筆を取ったという。力強い画風で、墨の濃淡を調和させて、扇の画面形式を巧みに生かした構成と自由な運筆は、山水の景致を表現している。朱文壺印「錬」は、一層気楽な祝賀の雰囲気を漂わせている。扇面画の賛には大正癸亥五月、つまり 1923 年 5 月と記される。（ただし、実際に竟山が 60 歳になったのは 1922 年のことである。）図 7 とセットとなっている図 8 の書簡には、竟山の甲子寿の祝賀について記されている。また鉄斎は、書簡に扇面画の完成が遅れたことについて謝るほか、足が不自由で自ら訪問することができないことも語っている。

図 9

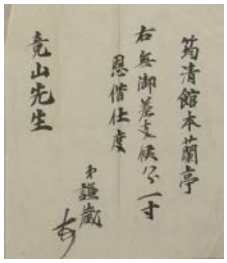

図 10

図 9 釈文　疎遠ニ相過候處、益御壮健之義可大賀也。愚息支那歴遊ニ付御配慮ニ預リ満悦致候。無事報折々来、御省慮可被下候。此私簡従洛西到来致、乍少々呈上致候。一鳴牛地之疎情、御断リ旁如斯。四月二日。富岡鉄斎。山本竟山様。侍史。

図 9 は、竟山が大事に保存していた書簡の一つであり、「富岡鐵齋」の題箋が付されている。息子の謙蔵への配慮が記されている。富岡謙蔵（1873-1918）、字は君撝、号は桃華、1903 年に京都帝国大学附属図書館和漢目録の編纂を嘱託され、1908 年に京都帝大東洋史講師となった、ま

[6] 段成式（803-863）撰『酉陽雑俎』は、中国の唐代に荒唐無稽な怪異記事を集録した書物である。20 巻・続集 10 巻。860 年頃の成立である。

た、京都学派の金石学者である。しかし、46 歳という若さで亡くなり、鉄斎夫婦を大きく悲しませた。謙蔵は、1910、1911、1912、1917 年に計四回中国に渡り、竟山が 1912 年の中国遊学から帰って京都に移住した事実から、図 9 の書簡は 1912 年に竟山が帰国した時に書かれたことがわかる。次に、竟山と謙蔵の関係を示す資料を列挙したい。

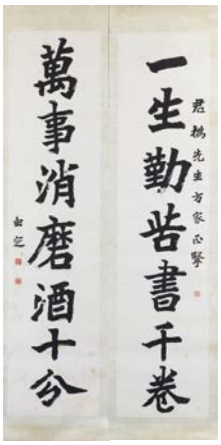

図 11

図 12

図 6

図 10 の文面には年月の記載がなく、竟山あての「筠清館本蘭亭序」の借用を打診する書簡である。文章は極めて簡略であるが、二人の交流の一端が窺える。図 11 の書作は、竟山が謙蔵のために揮毫した楷書七言聯で、中国北宋の政治家で詩人でもある歐陽修（1007－1072）の名句「一生勤苦書千卷、萬事消磨酒十分」（一生に千卷の書で苦学し、万事の対応には酒があれば十分である）という内容であり、雅印の「高宇万世」（朱文円印）、「山本繇定印信」（白文方印）、鳳鳴（白文方印）が押印される。金石研究の専門家である謙蔵の学問を称賛する対聯であり、穏やかな安定感があり、均整のとれた構築と力強い運筆が「書千卷」と「酒十分」の気勢を表している。

図 12 は、竟山筆の扁額「不読五千卷書者、無得入此室書」（五千卷の書を読まざる者は、この室に入ることを得ず）である。柏木知子氏の研究によれば、この扁額は、大正初期ごろ、京都室町一条にある富岡家の玄関に掲げられたものである。元々鉄斎宅では、清末の趙之謙が揮毫した扁額を蔵していたが、残念ながら日本家屋には合わず、親交のあった竟山に託して縮写してもらったのである [7]。識語に「崔儦署戸語、桃花盦主 [8]命書以黏壁、將厲後學、非自標許。由定記之」という旨が記されている。中国崔儦 [9]の語が出典であり、謙蔵の依頼で書し、これを壁に掲げて、後学（将来、自分のためになる知識や学問）の励みとし、自分は非凡だとうぬぼれない、

[7] 柏木知子「万巻の書を読む－学者としての鉄斎」、図録『鉄斎美術館開館 40 周年記念　鉄斎』、清荒神清澄寺・鉄斎美術館、2015 年。

[8] 盦＝庵、いおり、草ぶき屋根の小さな家。

[9] 崔儦、生没年不詳、字は岐叔、北斉から隋にかけての官僚・学者である。

と記している。扁額の書写年代は不詳で、隷書の筆意がある楷書である。魏碑の書体を貫き、出鋒で入れ、線に厚みをつけていた竟山書風の特徴を現わす代表作といえよう。

三、雅会の文人ネットワーク

1、寿蘇会と赤壁会

寿蘇会は、富岡謙蔵と長尾雨山の計画で、京都円山公園の料亭左阿弥で開催された、詩文と書画技法を陶冶するための蘇軾記念行事である。大正5年、6年、7年、9年および昭和１２年の計５回開催されたが、謙蔵はなくなるまで、雨山と最初の二回（乙卯と丙辰寿蘇会）を主催した。開催日を蘇軾の誕生日である旧暦12月19日に設定し、1916年1月23日に乙卯寿蘇会が開催された。内容は、出席者が詩文を作成して交流し、また当日持ち寄った蘇軾関係の書画や書籍をお互いに観賞するというものである。「寿蘇会」の活動記録として、年代順に『乙卯寿蘇録』・『丙辰寿蘇録』・『丁巳寿蘇録』・『己未寿蘇録』が残されている。寿蘇会には鉄斎と竟山も加わり、参加者と文人交流のネットワークを築いた。また、『乙卯寿蘇錄』の題画（蘇公肖像）は鉄斎によるものである。1918年、他界にした謙蔵を偲ぶために、1919年に寿蘇会が一年中止されたが、そこには文人流の配慮が窺える。鉄斎は、謙蔵が主催した最初の二回のみ参加したが、竟山は、大正期の四回に全て参加した。

一方、鉄斎と竟山の交流は途切れることなく続いていた。大正11年（1922、壬戌）九月七日（陰暦の七月既望）は、蘇軾が元豊五年（1082）壬戌既望に長江左岸に遊び『赤壁賦』を詠んでから840年後の壬戌にあたる。これに倣い、長尾雨山が主唱し、鉄斎・竟山・内藤湖南を発起人とし、宇治川を赤壁に擬して船を浮かべ、寿蘇会と同じ趣旨を貫き、京都宇治の料亭菊屋で「赤壁会」を催した。

2、和漢法書展覧会と楊守敬追悼会

竟山は、書家、学者、収蔵家、出版業者など、日中の多彩な文化人の協力を得て、大正2年（1913）12月4日に京都府立図書館で、書を鑑賞する雅会「和漢法書展覧会」を主催した。そして、107点の名品を精選して、『和漢法書展覧会記念帖』にまとめた。この法帖は、翌年2月に油谷博文堂から出版されている。その中でも、豊富な知識や蒐集品を有する謙蔵は、少なくとも「近衛豫樂院公家熙飛白書額、清李文忠鴻章、翁相國同龢、清郭頻迦麝尺牘、清劉文正石菴箑面、清陳碧城文述尺牘」という6点を出品し、収蔵先として「京都　富岡君撝君」と記されている。

大正5年（1915）2月6〜7日、竟山が主唱して杨守敬の追悼会が行われ、京都府立図書館において遺墨展と講演会が催されたが、その際、図録はもとより展観目録や講演の筆録は出版さ

れなかった。謙蔵は、「校勘家トシテノ楊氏ノ功業」という題目の講演を行っている[10]。このほか謙蔵は、亡くなった年に竟山によって発足した平安同好会で講演したことがある[11]。

結語

以上、竟山と鉄斎及び謙蔵の交遊を物語る書簡や、書画作品を整理・解説し、協賛した雅会も視野に入れて考察を加えた。竟山あての鉄斎による書簡と画賛は、いずれも和式漢文の行草体で書かれている。一般的に、鉄斎の書といえば、気力と雅趣が溢れる前衛的な書とみなされている。鉄斎の書は、既成概念に囚われず、自由な書風であり、判読がなかなか難しい。しかし、そこに鉄斎書の個性を見出だすことができよう。また、造形・構図という観点から見れば、金石の「気」を持っている竟山の書と、リズム感に溢れる鉄斎の書は、「視覚芸術」という共通性があるといってよい。

文人世界に心酔した若い頃から、中国の文人世界に憧れ、個性や鑑識眼を培ってきた鉄斎は、日中の研究者や芸術家らの名士との交遊を豊かに重ねた。一方竟山は、数回中国に渡り、新たな金石書画などの作品や資料を持ち帰り、ある程度鉄斎に提供した。恐らく鉄斎は、それによって自身の見識や視野を広めたはずである。

また鉄斎は、竟山からの自分と息子への配慮に感謝し、竟山に対する感謝の気持ちを絵画に託した。一方、竟山も度々鉄斎父子のために揮毫した。また、各々が主催した大正京都の雅会に、人と物の両面において互いに協力を惜しまなかった。竟山と鉄斎父子の交遊は、大正期京都の文人交流の貴重な一側面を示すものである。彼らは、雅会において文人交流ネットワークの形成に力を入れ、関西文芸を盛り上げることに尽力したのである。

参考文献

本田成之「富岡鉄斎翁伝一」、『美術研究』106 号、1940 年
本田成之「富岡鉄斎翁伝二」、『美術研究』107 号、1940 年
本田成之「富岡鉄斎翁伝三」、『美術研究』108 号、1940 年
長尾正和「京都の寿蘇会」、『書論（特集 蘇東坡とその周辺）』（5） 書論研究会、1974 年
戦暁梅「富岡鐵斎：賛文に潜むもう一つの藝術観」、『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』25、2002 年
野中浩俊「鐵齋の書美（十六）：杉浦丘園宛書翰」、『書叢』16、新潟大学書道研究会、2002 年
野中浩俊「富岡鐵齋－書美の特異性－」、『書学書道史研究』13 号、2003 年

[10] 柏木知子「鉄斎と謙蔵」、『書論（特集 京都学派とその周辺）』（39） 書論研究会、2013 年、151 頁。
[11]「金石文字ハ書道ノ基礎ナルコトヲ論ズ」、同 8。

野中浩俊「鐵齋の書美（十八）：諏訪蘇山宛書翰(2)」、『書叢』18、新潟大学書道研究会、2004 年
柏木知子「鉄斎と謙蔵」、『書論(特集 京都学派とその周辺)』(39)書論研究会、2013 年
柏木知子「富岡鉄斎の見た赤壁会」、『書論(特集 京都学派とその周辺)』(39)書論研究会、2013 年
神野雄二「日本篆刻家の研究：富岡鉄斎の篆刻と篆刻論」、『熊本大学教育学部紀要』66、2017 年

※本研究は、日本科学協会の笹川科学研究助成による助成を受けたものです。